

## 書評 山本博之著『脱植民地化とナショナリズム -- 英領北ボルネオにおける民族形成』

著者	井口 由布
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	2
ページ	81-85
発行年	2007-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007389">http://hdl.handle.net/2344/00007389</a>

山本博之著

『脱植民地化とナショナリズム  
ム 英領北ボルネオにおける民族  
形成 』

東京大学出版会 2006年 xi + 369ページ

井 口 由 布

## はじめに

山本が着目する英領北ボルネオとは、現在ではマレーシアのサバ州にあたる地域である。サバは、ボルネオ島にあるもうひとつのマレーシアの州であるサラワクとともに東マレーシアを形成している。西マレーシアないしはマラヤと呼ばれるマレー半島地域に関する記述が暗黙のうちに中心を占めるマレーシア研究において、サバをふくむ東マレーシア地域はつねに副次的なまなざしを向けられてきたといえるだろう。

英領北ボルネオに焦点をあてた本書は、この地域に関する圧倒的な資料の渉獵と読解にもとづいて、マレーシア研究における上のような傾向へ挑戦し、さらにはそれを超えて一國研究という地域研究における暗黙の枠組みへも挑戦しようとしているようである。本書は、この地域をとりまくさまざまな力関係をとおして、サバが形成されていくさまを明らかにし、その過程から、マレーシアという国民国家の形成の過程をも解明していく研究である。その形成の過程は、けっして必然性にたづぬかれたものではなく、むしろ偶発性に関わられたものであることが理解できる。

## 構成

最初に本書の構成を簡単に述べておこう。

『アジア経済』XLVIII 2 (2007.2)

はじめに

## 第 部 受け継がれるナショナリズム

## 第 1 章 学説史の整理

## 第 2 章 歴史的・社会的背景

## 第 部 均質なネイションを求めた人々

## 第 3 章 ステファンとその「原住民」概念

## 第 4 章 K・バリとその「民族」概念

## 第 5 章 サバ・ネイション概念の誕生

## 第 部 文明の光を継ごうとした人々

## 第 6 章 イギリス帝国の中のカダザン人

第 7 章 マレー・イスラム世界の中のムスリム  
/ マレー人

## 第 8 章 北ボルネオの「愛国華僑」と中華商会

## 第 部 脱植民地化における民族形成

## 第 9 章 マレーシア連邦構想

## 第 10 章 政党結成と民族認識

## 結 論

本書は4つのパートからなりたっている。第 部は、学説史と背景の整理である。ナショナリズム研究とサバ研究に関する学説が整理され、舞台となる1950年代の英領北ボルネオとその周辺における住民がどのような民族として理解されていたかが明らかとなる。第 部は、ドナルド・ステファンとK・バリという サバ・ネイション 概念を展開させた2人の思想家をとりあげている<sup>(注1)</sup>。この2人はどちらもサバという土地にこだわり、過去の本質性や民族的純粋性へ向かうのではなく、未来へ向かってつくりだされるネイションを構想しようとした。米国のネイションモデルを参照したステファンは、移民でも混血でも サバ・ネイション になることができるという考えを表明した。また、マレー半島東海岸のクランタン出身のチャイニーズ・プラナカンであるバリは、インドネシアのナショナリズムを理念型として、マレー語をとおしてサバ・ネイションを構成することを提唱した。いずれも山本の言葉でいうならば「外来者」性をまとった2人がサバのネイション構築を構想したのである。第 部は、ステファンとバリの構想にたいするさまざまな同意と異議の検証である。プナンパン・カダザン人指導者は、

ステファンやバリの未来志向のネーション概念にたいしては土着性をおかけ、マレー半島やインドネシアのイスラム勢力を背景とするマレー系にたいしては英語とキリスト教に代表される文明をもちだした。マレー系は、ブルネイ・マレー人が中心的指導層であり、マレー語とイスラム教によってブナンパン・カダザン人指導者に対抗しただけでなく、イスラム教に改宗したものの、イスラムという要素をそれほど重要視しなかったバリの構想にたいしては、イスラム教によって対抗した。中華系住民である華人は、本国と現地（サバ）とのあいだで引き裂かれた存在であった。第 部は、第 部と第 部で登場したさまざまな構想が、脱植民地化の過程において、どのように 均衡 へと向かったのかが解明されている。英領北ボルネオにおける脱植民地化は、シンガポールとサラワク、英領北ボルネオ、ブルネイがマラヤに加わることで結成されるマレーシア連邦の形成をとおしてなされるというアイデアがマラヤやイギリス側から提出された。これまで登場してきた英領北ボルネオにおけるさまざまなネーション構想は、マレーシア構想との折衝において変容を遂げていく。

### ステファンとバリ

最初にも述べたが、本書の魅力は、英領北ボルネオに関する圧倒的な量の資料の読解にもとづいて、この地域のネーションをめぐるさまざまな構想が、たがいに同意と異議の過程をへながら形成されていくさまを明らかにしている点である。英語、マレー語、中国語、カダザン語の各資料を網羅的に検討したこのような著作がこれまでにあったらどうか。けっして読みやすい文章とはいえない。しかしながら、この圧倒的な資料の存在によって、読みすすめてゆくうちに1950年末からの英領北ボルネオのようすが、しだいに明らかになってゆくのである。そのありようは、簡単に図式に表されるようなものではない。そこにはさまざまな構想が登場するが、はじめからはっきりとした形となってあらわれているわけでもない。それこそ、ほかの構想との対抗や合意の関係のなかで、形を明らかにし、そうかといえ

ば変容させていく。

山本が着目する1950年末の英領北ボルネオでは、マラヤとは異なり、植民者による民族の分類方法が確立していなかったという。マラヤではこの時期までに、マレー人、華人、インド人 という分類方法がおおよそ確立し、住民みずからがこのような分類方法を内面化し、これにしたがって政党を形成していた。しかしながら、北ボルネオでは白人対 非白人、文明 対 未開 など、山本がいうところのアイデンティティの 標識 がさまざまに存在していた。すなわち北ボルネオではアイデンティティは抗争状態にあったのである。

このようななかで、北ボルネオではドナルド・ステファンとK・バリという2人の卓越した思想家が登場した。難解な本書を面白くさせている理由のひとつは、この2人の思想である。2人の思想をあつかった第 部は本書における最初の山場である。2人の思想とは、マジョリティから排除されたものたちによる、マイノリティに開かれたコミュニティのありかたを模索したものであるといえよう。ステファンは、植民者の血をひきつつ、現地生まれの混血として支配社会から排除された人物である。かれは、サバに生まれ育ち、サバに帰属意識をもつことでサバの「原住民」となれるのだと主張する。そこには血統も言語も宗教も関係ない。植民者の血をひくステファン自身もサバの「原住民」となることができるのである。

他方、K・バリはマレー半島の東海岸にあるクランタン生まれのプラナカン・チャイニーズであるが、偶然訪れることとなったサバの地においてその思想を醸成させることになる。かれはインドネシアのナショナリズムの影響を受けて、マレー語という言語を 標識 として、サバ人 になるということを主張する。言語はその人に本来的に備わっているものではなく、学べるものである。バリは、新聞『サバ・タイムズ』のマレー語コーナーにおける言語的な実践をとおして、未来へ向かってつくられるものとして サバ・ネーション を構想した。

どちらも北ボルネオという植民地行政のなかで偶然つくられた場所にこだわるどころから、ネイシ

ンの構想をはじめようとしている。北ボルネオがサバという名前によって呼ばれるようになる過程とは、植民地主義のなかで偶発的につくられた場所を、みずからの意味のある場所にしようとする「領有」(appropriation)の過程であるとも読みとれる<sup>(注2)</sup>。両者の特徴は、土着性や純粋性などを追求する本質性の政治へと向かわずに、未来へ向かってつくりだすことのできるアイデンティティのありかたを構想したところである。かれらのアイデンティティ概念は、排除によって結束する本質性の政治ではなく、さまざまな人々に向かって開かれたものであった。

### 諸構想による交渉

本書における第2の山は第 部にある。ステファンやバリの開かれたアイデンティティに関する構想にたいして、さまざまな立場のものたちがさまざまな構想をかかげていく。これらの構想はほかの構想との交渉関係において形成され、また、ステファンやバリの構想もこの交渉関係のなかで変容していく。

このパートで興味深いのは、第6章におけるカダザン の急激な登場と定着の過程である。ステファンが 原住民 という概念を新たにサバをつくらうとしている一方で、異なる 原住民 概念が登場する。カダザン という言葉の登場は、ブルネイに近いプナンパンに住む人々がみずからカダザン と呼んだことをきっかけとする。この地域においては、ブルネイが マレー的なもの や イスラム的なもの によって 文明 を代表し、北ボルネオのキリスト教徒たちを自分たちより劣った ドゥスン人 であるとみなしていた。ブルネイに近いプナンパンの人々は、ドゥスン人 とは東部に居住するキリスト教徒たちで、みずからは ドゥスン人 ではなくカダザン人であると主張した(165ページ)。ブルネイによるまなざしを内面化し、より弱いものを新たにつくりだそうとするこの力関係は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』を参照しながら、近代日本における沖縄人へのまなざしを解明した富山一郎を思い起こさせる[富山1990]<sup>(注3)</sup>。さらに、本書において興味深いのは、西

洋から日本へ、日本から沖縄へ、沖縄から南洋諸島へと弱いものへ弱いものへと向かう階段状のまなざしと異なり、ブルネイから遠い東部地域の人々には、ドゥスン という言葉に劣位のコンポジションがないところである。富山が解明したのは近代的なタームによって力関係がつけられていくありさまで、中国との朝貢関係のような伝統的な関係性はみつけれなかったが、山本が着目するこの時代のサバでは、伝統的な力関係が近代的なタームによって書きかえられようとするまさにそのときであり、さまざまな関係性が錯綜しているようだ。

さて、伝統的な文化的先進地域であるブルネイとの関係から生まれた カダザン という言葉は、今度は別の力学のなかでつくりかえられていく。つまり、マレー・イスラム圏は伝統的な先進地域としてだけでなく、今度はマラヤやインドネシアといった主権国家としてその存在を露わにしてきたのだ。誕生の当初には東部と西部を分断する 標識 となっていた カダザン は、北ボルネオの先住民マジョリティ をまとめる 標識 となっていく。そこでは マレー的なもの と イスラム的なもの による 文明 に対抗して、キリスト教的なものにつらなる 西洋 の 文明 が対置された。プナンパンの人々だけでなく、サンダカンのような東の地域においてもカダザン という言葉が使われるようになるのは、ほんとうに短い期間における変化であった。この短期間にプナンパンの人々も、当初はドゥスン であるとみなしていた東の地域の人々をカダザン であると認めるようになるのだ。

カダザン という言葉の誕生は、ステファンの構想にも変化をおよぼしていく。サバ に生まれ育ったすべての人々に開かれた新しい 原住民 概念は、カダザン との政治的折衝のなかで、徐々に姿を消していく。

他方、バリによるマレー語を媒介とした新しいサバ・ネイション も、マレー・イスラム圏を担おうとするものたちによるネイション構想との交渉過程においてしだいに影響力を失っていく。バリのサバ・ネイション はマレー語を学ぼうとする意志によって結びつけられるはずであったが、バリの

担当する『サバ・タイムズ』のマレー語コーナーに集った人々は、マレー語よりもむしろイスラム教を重視し、バリとは異なるネイション構想を紡ぎだしていくのである。

#### 思想的言説の分析における問題

バンサ , 民族 , ネイション , 北ボルネオ , サバ , アナッ・サバ , バンサ・サバ , ボルネオ先住民族 , ドゥスン , カダザン , ムラコ (マレー) , マラヤ , ブルネイ , 原住民 , イスラム , 西洋。これらは、本書のなかで、北ボルネオにおけるアイデンティティの構成に関して登場するさまざまな名である。これらの名は、時代、地域、立場において異なるコノテーションをもち、さらには、同意と対立の交渉関係のなかで意味合いを変えていく。しかも、これらは、英語、マレー語、中国語、カダザン語という多言語の資料においてあらわれたものなのである。

この言説の空間を 外 から冷静に見つめようとする著者は、日本語を駆使して分析をこころみる。だが、この日本語のタームにもさまざまなコノテーションが付きまとい、対象をとえるための分析概念が、いつのまにか対象たちによって汚染され、著者たる山本までもが言説の海のなかへとひきずりこまれていくのだ。たとえば、山本が分析概念として使おうとする 民族 という言葉は、たいへん厄介である<sup>(注4)</sup>。山本は、「何らかの文化的な特徴を共有するとみなされ、そのため何らかの指標によって括りうる人間集団」(26ページ)を 民族 と呼ぶとしている(下線の強調は評者)。文化的な特徴を共有しているとみなしている、明示されない「主語」と、何らかの指標によって括っている明示されない「主語」は、同一なのだろうか、それとも別なのだろうか。また、山本は 民族 , 「民族」, ネイション という3つの日本語による概念語を利用しているが、それらには英語との相関性はあるのだろうか。また、本書のなかで日本語に翻訳された思想家たちが使用した《民族》という言葉はどうとらえたらよいのだろうか。そもそも原語にはどのような言葉が使

用されているのだろうか。1958年7月28日の*North Borneo News and Sabah Times*におけるバリの記事からの引用では、「この国の人々は、民族を問わずにマレー語が使える」(108ページ、下線部強調は評者)とあるが、残念ながら原語の表記はない。多言語を日本語に翻訳した結果である「あの《民族》」と「この《民族》」の原語はどのような語であり、使用されたその資料においてはどのようなコノテーションをもつのか、よりいっそう知りたいところである。

言葉を使って思考する以上、人は言葉の世界の外にでることはできない。言説を分析することの難しさはここにある。本書は、言説の 外 というものがないのだということを、実践的に示しているといえるだろう。

#### む す び

北ボルネオにおいてみられたさまざまな構想は、インドネシアのような華々しいナショナリズムの開花や宗主国との激しい独立運動を導くことはなかった。山本の呼ぶところの 自信のないナショナリスト たちは、人々の動員のためにみずからの主張をたびたび変更させ(5ページ)、第 部でみられるように現実主義的な対応を行っていった。山本は、これらを 戦わないナショナリズム と名づけ、以下のようにその思想的可能性を提起している。

(前略) 国民国家体系の限界を唱え、それに替わる新たな社会原理を模索するという、理論面からの検討がすでに多くの論者によってなされている。本書がこれらの議論に付け加えることがあるとすれば、「戦わないナショナリズム」を積極的に評価することを通じて民族アイデンティティが必要とされるしくみを解明し、これをもとに、国民国家体系への固執や忌避を前提とすることなく新たな社会原理の可能性を検討することにある(4ページ)。

戦うナショナリズム の果てに、新植民地主義と開発独裁があることを批判的に再考しなければならない現在において、妥協と和解のナショナリズムを

積極的に提起することは可能かもしれない。だが、新たな社会原理の模索のためには、戦わないナショナリズムは現状肯定と現実主義を超えていかなければならないだろう。その可能性は、つぶされてしまった諸構想のなかにこそ見いだされるのではないか。つまり、ステファンやバリによる、本来性や純粋性による排除の政治へは向かわない、外へと開かれた構想である。

(注1) 本書におけるかぎ括弧の使い方が複雑であるため、それと区別するために本稿においては、本書からの言葉の引用は従来のかぎ括弧に変えて「」を使用する。ただし、文章の引用に関しては従来通りかぎ括弧「」を使用することとする。

(注2) 「領有」とは、「すでに存在する諸表象のなかからつごうのよいものを選択的にえらびとりみずからのものにするることによって、あらたな文化的主体を構築する作業」(林 2001, 27)である。

(注3) 富山によれば、近代日本社会における「日本人」のアイデンティティ形成は、「西洋」によるオリエンタリズム的なまなざしを内面化することによってなされたが、そこには「領有」とよべるような過程がふくまれていた。優劣の判断をともなった二項対立の図式を「沖縄人」とのあいだに当てはめ、「沖縄人」とは異なる「優れた日本人」としてみずからのアイデンティティをつくりあげたのだ。他方、劣位の側におか

れた「沖縄人」はみずからを規律化して「日本人」になろうとした。また、富山は別の論文で、この「沖縄人」たちが同様の二項対立の図式を南洋諸島においてもちこんだことを描いている[富山 1996]。「沖縄人」たちはみずからを「日本人」と表象し、南洋の人々を劣位の側へとおくことによってみずからのアイデンティティを構築した。

(注4) 山本はかぎ括弧のついた「民族」とかぎ括弧のつかない民族を分析概念としては分けて使用している。そこでこの書評では山本が使用しているかぎ括弧なしの民族を「民族」とし、かぎ括弧つきを「民族」とする。また、山本の分析対象である資料の引用にあらわれる翻訳語を示すときには便宜上《民族》としておく。

### 文献リスト

- 林みどり 2001. 『接触と領有 ラテン・アメリカにおける言説の政治』 未来社 .
- 富山一郎 1990. 『近代日本社会と「沖縄人」 「日本人」になるということ』 日本経済評論社 .
1996. 『熱帯科学と植民地主義 「島民」をめぐる差異の分析学』 酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁編 『ナショナリティの脱構築』 柏書房 .

(立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部常勤講師)